銘傳大學97學年度研究所碩士班招生考試

應用日語學系碩士班

日本文學史試題(第四節)

(限用答案本作答)　　□可使用計算機 ☑不可使用計算機

※本試驗はすべて日本語で答えなさい。

一、次の文章をよく読んで、それぞれの【作品名】【作者】に振り仮名をつけるうえ、その【内容】を説明しなさい。(4%×5=20%)

1.「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふる物は、日々旅にして旅を栖とす。」

2.「秘すれば花なり、秘せずは花なるべからず、となり。この分け目を知る事、肝要の花なり。」

3.「あかねさす　紫野ゆき　標野ゆき　野守は見ずや　君が袖ふる」

4.「春はあけぼの。やうやう白くなり行く、山ぎは少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。」

5.「世に従へば、心、外の塵に奪はれて惑ひやすく、人に交れば、言葉よその聞きに随ひて、さながら、心にあらず。人に戯れ、物に争ひて、一度は恨み、一度は喜ぶ。(略)惑ひの上に酔へり。酔ひの中に夢をなす。(略)未だ真の道を知らずとも、縁を離れて身を閑かにし、事にあづからずして心を安くせんこそ、しばらく楽しぶとも言ひつべけれ。」

二、次の文学理念／文芸思潮を100字以内の短文で述べなさい。(5%×6=30%)

1. <をかし>
2. <無常>
3. <私小説>
4. <反自然主義(白樺派)>
5. <内向の世代>
6. <写生>

本試題兩面印刷

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(20%)

[A少年は、貧しい家の子どもで犬好きのBを誘い、知り合いの「犬屋」を見学に来ている。]

銘傳大學97學年度研究所碩士班招生考試

應用日語學系碩士班

日本文學史試題(第四節)

　□可使用計算機 ☑不可使用計算機

＜原文＞

一わたり案内すると、

「それでは、あとは勝手に見物してください。倦きたら、もとの部屋に戻ってくださいな」と青年が言い、姿を消した。

犬たちは全部柵の中に入れられており、通路は閑散としていた。二人の少年だけが、やや手もちぶさたに、歩いていた。そのとき、一匹の黒い犬が、身をかがめるようにして向うから歩いてきた。

Aは口笛を吹き、掌を上に向けて、手まねきした。千早号に軀をすりよせられ纏い付かれたあとなので、Aのその態度には①　　が滲み出ていた。

しかし、その黒い犬はAの方を見向きもせずに、同じ足取りで二人の少年の傍を通り過ぎて行った。

Aは団扇を使うように上下に揺すぶっていた掌の動作を途中でやめ、そのままの姿勢で地面の上につくりつけたような形になった。②乾いた堅い地面を踏む犬の蹠の規則正しい音が、異様に鋭くAの耳のなかで鳴った。

その音が不意に、聞こえなくなった。電気仕掛けの機械人形に、ふたたび電流が通じ始めたように、Aは首だけうしろに深くまわした。すると、立止っていた黒い犬も首だけまわしており、視線が合った。

その瞬間、黒い犬は勢いよく走り出した。晩夏の日射しに照りつけられて白く乾いた地面から、埃がくっきりと立昇った。黒い犬は、Aを目標にしているように、真一文字に走ってきた。首を深くまわした姿勢のまま、Aは走ってくる犬を眺めた。黒い犬は軀ごとAのふくらはぎに突当り、剥ぎ出した歯をAの脚の肉に当てた。そして、そのまま、Aの傍を躯をこすりつけるようにして走り抜け、みるみるその姿は小さくなり、曲り角で消えた。③獣のにおいが、強くAの鼻を撲った。

噛みついた、というのとは少し違う、とAがおもったとき、Bの声が聞こえた。

「や、噛みついた」

Bは一瞬口を噤み、

「へんな犬だなあ」

と言い、つづいて爆笑的に笑い出した。その日はじめて聞いた、少年らしい明るい愉快そうな笑い声だった。

その笑い声は長くつづき、Aはむっとした表情で黙って佇んでいた。Bはようやく自分の笑い声に気付いた様子で、不意に口を堅く閉ざした。

【吉行淳之介『子供の領分』による】

問題1．空欄①を補うのに最もふさわしいと思われることばを書きなさい。(4%)

問題2．下線部②「乾いた堅い地面を踏む犬の蹠の規則正しい音が、異様に鋭くAの耳のなかで鳴った。」から、A少年のどのような心理がわかるか。200字以内で説明しなさい。(8%)

本試題兩面印刷

銘傳大學97學年度研究所碩士班招生考試

應用日語學系碩士班

日本文學史試題(第四節)

(限用答案本作答)　　□可使用計算機 □不可使用計算機

問題3．下線部③「獣のにおいが、強くAの鼻を撲った。」から、A少年のどのような心理がわかるか。200字以内で説明しなさい。(8%)

四、次の問題を500字以内で答えなさい。(30%)

1．＜森鴎外＞について知っていることを書きなさい。(5%)

2．新感覚派の天才と呼ばれる横光利一の作品—『頭ならびに腹』(1924)—の冒頭文章を新感覚派の特徴を考えながら分析しなさい。(15%)

真昼である。特別急行列車は満員のまま全速力で馳けてゐた。沿線の小駅は石のやうに黙殺された。とにかく、かう云ふ現象の中で、その詰み込まれた列車の乗客中に一人の横着さうな子僧が混つてゐた。彼はいかにも一人前の顔をして一席を占めると、手拭で鉢巻をし始めた。それから、窓枠を両手で叩きながら大声で唄ひ出した。

「うちの嬶ア、福ぢやア、ヨイヨイ。福は福ぢやが、お多福ぢや、ヨイヨイ。」

人々は笑ひ出した。しかし、彼の歌ふ様子には周囲の人々の顔色には少しも頓着せぬ熱心さが大胆不敵に籠つてゐた。

「寒い寒いと、云たとて寒い。何が寒かろ、やれ寒い、ヨイヨイ。」

彼は頭を振り出した。声はだんだんと大きくなつた。彼のその意気込みから察すると、恐らく目的地まで到着するその間に、自分の知つてゐる限りの唄を唄ひ尽さうとしてゐるかのやうであつた。歌は次ぎ次ぎにと彼の口から休みなく変へられていつた。やがて、周囲の人々は今は早やその傍若無人な子僧の歌を誰も相手にしなくなつて来た。さうして、車内は再びどこも退窟と眠気のために疲れていつた。

(『頭ならびに腹』(1924))

3．今まで一番印象に残った本を紹介しなさい。(10%)

試題完　(終わり)